

『教育新報』一九八〇年四月（教育評論社）

フレネ著・宮ヶ谷徳三訳『手仕事を学校へ』

明日の学校への招待

この本を読んで私は感動とともに一種の寂しさを味った。この本はフレネの教育改革運動の指針の書として書かれている。そこに書かれたことを具体的に実践してゆく人が数多くいるということ、それを土台としてこれが書かれていることに感動させられたが、同時に、日本の教師でこういうフィロソフィー（考え方）に賛同できる人がどれ位いるかと考えて寂しさを禁じ得なかったのである。

この書は、運動の具体的な指針として述べられているが、われわれがまずとらえなければならぬのは、そのフィロソフィーである。具体的な行動としては、この書に書かれたことを今すぐ実行することは恐らく日本ではだめだろう。われわれ自身の現在の状況の中から、なすべきことを発見し、生み出さなければなら

ないのだ。だから、そのためには、この具体的な指針の中ににじみ出ている思想をまず第一に読みとる必要がある。

その意味で、序に述べられていること、

「十九世紀の新しい段階では、人民の教化が経済的に必要となった。」

「理想主義的大学の学論や書籍がどのようなものだったにせよ根底においては人民を高めることは問題ではなく、機械中心主義が人民に課す新しい仕事を、合理的な効率で遂行できるよう人民を養成することが課題であったのだ。」は現代国家、社会に対しての痛烈な批判である。これは日本にそのまま当てはまる。しかしそれは権力に対してのみ言われているのではない。フレネは親に対しても言

う。

「事実、大部分の親たちにとって重要なことは、その子供たちの人格形成や、人格を深く豊かなものにさせることなく、試験に挑み、人に羨まれる地位を占めること、然るべき学校に入ること、あるいは然るべき役所で安定した地位を確保するために十分な学力をつけさせることである。」

これも日本の状態そのままを言われていることといってもよい。きびしい批判である。つまり誰も人間を育てることなどは考えていないのだという反省が、フレネの運動の原点なのである。しかし日本の人たちは、それをはっきり把握される人がいるのか。受験戦争の状況をみると、そんなゆとりはないというのが本音だろうか。

「われわれは真の教育目的を決めなければならぬ。それは子供は自分が役立ち、自分に役立ってくれる理性的共同体の内部で自己の人格を最大限に発展させるということである。」

これは具体的にどういう教育になるのか。そこにフレネの人間の真実への洞察が働く。個人であって社会、社会であって個人である

人間、つまり共同体の一員としての人は、仕事の中で育つのだという。彼の言う仕事とは何であろうか。それは次の言葉が示す。

「福音書をもじってわれわれは二十世紀に次のように言おう。はじめに仕事と活動ありき。そして仕事こそ神なりき」

ここで仕事というのは、われわれがつい同義語にし勝ちな労働ではない。近代社会は人間が人間としての仕事を奪って、労働という売り買いの対象を生み出した。そして人間は給料をもらう奴隷の境遇への道を歩き出した。人間社会と人間が生きてゆくための仕事はあらためて創り出されねばならぬ。そしてその仕事の中でこそ、真の人間が育つのだ。フレネはそう考える。そこで言うのだ。

「明日の学校は、仕事の学校となる」この言葉には万感がこもっているが、その中身を語るのがこの本の全体である。

「ことば中心主義、教科書、練習ノート、レッスンを口の中でもぐもぐ読むことや、あらすじの暗記、手本に従って行なうペン習字といった内容の百年も遅れている学校にのんびりしてはならない」

こういう考え方で彼は幼児から小
学生段階の教育について大変具体的
指針を出してみせる。これは教育の
場が自然の中へ入りこみ、学校がア
トリエになつてしまうこと、つまり
仕事場になるのだ。その具体的な叙
述は直接に本書で読んでみてほしい。

「新しい状況に子供が適応して
ゆくのに不可欠である手さぐりの
実験ができないような環境では、
教育とは授業、身振り、いろいろ
な手品を使つて一種の幼児体操の
ようなことをするだけだろう」こ
ういうところを読むと、日本は小中
高校がみんな幼児体操をやっている
のではないかと思わせられて、思わ
ず苦笑させられる。

こういう方向がもう十年早く、
そこしでも日本に芽生えていたら
今頃の校内暴力などというものは
生れなかったし、またあつても克
服する道がすぐ見えたのだと思う。
さて今からでもおそくはないから、
明日の教育を招きよせるために、
是非読んでほしい。

矢 口 新

（能力開発センター所長）